

公開講演会

日本語を共通に話す日本国民意識が成立したのはそう古い出来事ではない
近代国民国家形成の歩みを、一緒に振り返ってみよう

日時 2018年2月25日(日)午後1時から6時

場所 早稲田大学3号館301号室 (政経)

講演

「北海道開拓150年目の負の遺産： アイヌの権利を考える」

市川 守弘 弁護士

西洋の人類学を受容した日本の学者たちは、アイヌ人骨と埋葬品の蒐集を積極的に行った。蒐集は明治から1960年代まで続けられ、成果は海外にも発表された。かくしてアイヌの骨と埋葬品は旧帝大をはじめとする全国の機関や海外に所蔵されることとなった。

その蒐集の過程は先住民の尊厳に対する敬意を欠くものであったことは否めない。アイヌ遺骨はドイツから先年、返還されたが、そこには先住民研究に対する世界的な潮流が反映されている

アイヌの方々から遺骨返還を求める声があがって久しい。アイヌ遺骨返還問題に真摯に取り組んでこられた市川守弘弁護士に、映像を交えて分かりやすく同問題を語っていただく。

市川先生は若き日のアメリカ留学でインディアンの人権を踏まえてアイヌ研究を発表されるなど、国際的な視野の活動を続けておられる。アイヌ遺骨返還問題を聞き、現代の日本の姿を考えたい。



「ピウスツキのサハリン研究とバフンケの髑髏」

井上 紘一 北海道大学名誉教授

消滅の危機に瀕していたアイヌの言語は、有志たちの努力により保存が図られている。中でも20世紀初頭にアイヌの肉声が蝸管に録音されたことは、奇跡的な貢献であった。採録者はロシア帝国の流刑囚でリトワニア生まれの人類学者ブロニスワフ・ピウスツキである。ピウスツキはサハリンのアイヌ村で暮らし、チェフサンマをめぐった。チェフサンマの叔父で村長でもあったバフンケの遺骨は今、どこに収蔵されているのだろうか。

ピウスツキ研究の世界的権威、井上紘一北大名誉教授を招いて語っていただく。大著『ブロニスワフ・ピウスツキのサハリン民族誌』を出版されたばかりの井上先生に貴重な成果を伺い、共に考えたい。



アイヌと近代日本そして樺太

主催 日本東欧スラブ関係研究会 (ieda@aoni.waseda.jp)

共催 科研費新学術領域研究「和解学の創成-正義ある和解を求めて」